



昨年度の受賞者

平成 28 年 12 月 2 日（金）

愛知県農林水産部農林政策課企画グループ
担当 荻野、江本 内線 3658、3624
電話 052-954-6395（ダイヤルイン）
公益財団法人 愛知県農業振興基金
担当 久田、佐藤
電話 052-951-3626

愛知県の農業・農村の振興や発展に尽力した方を表彰します ～平成 28 年度愛知農業賞（あいちアグリアワード）表彰式～

公益財団法人愛知県農業振興基金では、愛知県の農業・農村の振興や発展に尽くした個人や団体を表彰する農業振興功労者表彰事業（表彰名：愛知農業賞（あいちアグリアワード）※¹）を平成 18 年度から実施しています。

この事業は、愛知県が 50 年余にわたって表彰を続けてきた「山崎賞」「岩槻賞」という権威ある農業賞を継承し、両賞の理念を引き継いだものです。

この度、下記のとおり平成 28 年度愛知農業賞（あいちアグリアワード）の受賞者が決定し、表彰式を開催しますのでお知らせします。

記

1 平成 28 年度愛知農業賞（あいちアグリアワード）受賞者※²

（1）担い手育成部門

吉野隆子 様（よしの たかこ）（名古屋市 60 歳）

有機農業の推進のため、直売所の運営を行うとともに、就農相談センターを開設し、有機農業を志す人達からの就農や経営に関する相談を受けている。研修先には直売所で販売している有機農業者を紹介し、栽培技術の指導体制を作り上げた。

また、新規就農者の販路の紹介や就農資金のサポート等も行い、有機農業を目指す新規就農者にとって、心強い味方となっており、これまでに 27 名が新規就農している。現在 10 名の就農予定者が研修を受けており、今後も有機農業の担い手育成活動において大いなる活躍が期待される。

夏目安勝 様（なつめ やすかつ）（新城市 63 歳）

農業教育において、将来自分の経営に取り入れたい品目を調査研究テーマにさせた「課題解決型」学習を行い、生徒自らが考える農業を実践する教育指導に取り組んできた。

また、地元の農業振興を図るため特産品としてジネンジョや夏キャベツの栽培を実践し、その経験を基に新規就農者の栽培技術や経営に関する巡回指導を行い、新城地域の担い手育成に尽力している。

(2) 技術改善部門

鋤柄農機株式会社 様(すきがらのうきかぶしきがいしゃ) (岡崎市 創業 1835 年)

愛知県農業総合試験場が開発した、水稻作の不耕起V溝直播技術の実用化・安定化に向けた試験に協力し、同直播技術が実用化・安定化するよう改良を重ねてV溝直播機の製品化を実現した。これにより大規模農家は農作業の分散化や育苗・田植作業の省力化を図り、経営面積の拡大ができるようになった。

また、東三河地域におけるキャベツ産地で、従来型の畦成形機は「土量の調節がしにくい」「枕地が多く野菜移植機が入りづらい」という農家の意見・要望を受けて作業機の開発を手掛けて、地元農業における技術改善に取り組んできた。

愛知県農業総合試験場や県内農家と連携した技術の実用化・安定化への取組は、今後も愛知県農業の発展に寄与すると期待される。

(3) 農業・農村振興部門

鈴木 明 様 (すずき あきら) (小牧市 81 歳)

都市近郊のモモ生産において、生産部会活動の充実、部会員の栽培技術や所得の向上に関してリーダーシップを発揮してきた。新品種の導入や新技術の採用については、自らが試作や実証試験を行った上で、生産部会に導入推進を図った。

また、地元和洋菓子店への幼果の供給体制づくりならびに都市近郊を活かした直売方式(産直・庭先)の率先垂範など、部会員の所得向上に取り組んだ。さらに、高齢化するモモ生産農家の作業支援を行うモモ栽培サポーターの育成指導に熱心に取り組むなど、地域の農業・農村振興に大きく貢献している。

2 表彰式

(1) 日 時

平成 28 年 12 月 19 日 (月) 午後 2 時から午後 4 時まで

(2) 場 所

J A あいちビル 14 階 大会議室
(名古屋市中区錦三丁目 3-8)

(3) 主 催

公益財団法人愛知県農業振興基金

(4) 内 容

表彰状、副賞の授与式
受賞記念講演 (受賞者 1 名につき 10 分程度)

※ 1 愛知農業賞 (あいちアグリアワード) の概要については別紙 1 を参照

※ 2 受賞者の詳細な経歴、受賞理由については別紙 2 を参照

愛知農業賞（あいちアグリアワード）について

1 目的

本県の農業・農村の振興に尽力し、その功績が特に顕著で他の模範となる者を表彰することにより、後に続くものが、自信と誇りを持ってその振興に取り組むことを助長し、もって農業・農村の継続的な発展に資することを目的とする。

2 表彰制度創設の経緯

愛知県には50年余にわたって表彰を続けてきた「山崎賞」「岩槻賞」という権威ある農業賞があった。山崎賞は農業教育に貢献した教育者や農業者、優秀な農業に関する論文やプロジェクト成果を修めた学生に贈られていた。岩槻賞は農業技術の開発や改善、普及に貢献した技術者や農業者に贈られていた。

平成17年度に両賞を運営していた財団法人が各々解散した際、公益財団法人愛知県農業振興基金*が残余財産を継承し、両賞の理念を引き継いで「あいちアグリアワード」として平成18年度からスタートした。

なお、平成26年度から名称を「愛知農業賞（あいちアグリアワード）」に変更している。

※公益財団法人愛知県農業振興基金

優良種苗の供給、高度な営農技術の開発・普及、農産物のブランド確立、優秀な後継者の育成・確保などについて、農業者の創意工夫を活かした取組を促進し、愛知県の農業・農村の振興に寄与することを目的に、平成3年に愛知県と農業団体の出捐により設立された。

3 表彰の対象者等

表彰の対象者は、個人または団体とし、愛知県の農業・農村の振興に顕著な功績を挙げたものとする。

表彰部門は、担い手育成部門、技術改善部門、農業・農村振興部門の3つとする。

4 推薦・選考方法

推薦は推薦基準に基づき、県関係機関、市町村、農業協同組合等が行う。受賞者の選考は審査委員会で行い、理事長が決定する。

5 賞の内容

表彰状及び副賞30万円を贈呈する。

担い手育成部門



名古屋市

よしのたかこ
吉野隆子

吉野隆子氏は、名古屋市の「都市公園オアシス 21」での農産物直売所の開設に関わったことを契機に、名古屋市の中心部で有機農産物の情報発信を目指して奔走し、平成 16 年に「オアシス 21 オーガニックファーマーズ朝市村 (以下、朝市村)」を設立し、村長に就任してリーダーシップを取り、今日までその運営を支えている。朝市村は「点在する有機農業者の交流の場」として、また「有機農業者と消費者のマッチングの場」として活動を始め、さらに「年間通じた定期開催」を実現することで有機農産物の認知度向上を図り、参加している有機農業者に安定した販路を提供することに貢献してきた。

平成 21 年から有機農業を志す者への窓口として朝市村に「就農相談コーナー」を創設し、多くの就農相談に携わる中で、これまでに築いてきた有機農業者との信頼関係から「先進有機農業者への研修体制」を構築し、就農相談コーナーに訪れる相談者に対して、希望する就農地や栽培品目に応じた研修受入農家を提示している。これにより先進有機農業者と新規参入希望者との結びつきを強くし、有機農業への取組姿勢の伝承、栽培技術の習得促進が効果的に取り組めるようにしている。また、有機農業に参入する際の課題である生産物の販路についても、オアシス 21 以外にも販売場所を確保して新規の有機農業者に提供を図っている。さらに、青年就農等給付金制度、制度資金や農地確保等について関係機関との連携強化にも尽力し、これまでに 27 名が新規就農し、現在 10 名の就農予定者が研修を受けており、有機農業者の参入から定着まで多方面からの支援に中心的な役割を果たしている。

これまでに吉野氏が朝市村のある都市部と農業者が営農している地域を繋げてきたことにより、①農業体験に訪れ有機農業者に関心を持つ人の増加、②中山間地域や都市隣接地域の耕作放棄地の減少、③新規就農者の増加、④過疎地域への定住促進による活性化、など、さまざまな成果が生まれている。

このように、朝市村の運営に尽力する中で、有機農業者の新規参入から定着までを効果的に支援する体制を構築し、県農林水産事務所や市町とも連携強化を図り、意欲ある若手有機農業者の育成に精力的に取り組まれている。また、有機農業を通じて農業理解の促進や地域の活性化にも大きく貢献している。

担い手育成部門



新城市

なつ め やす かつ
夏 目 安 勝

夏目安勝氏は、昭和 51 年から教諭として愛知県立新城高等学校、猿投農林高等学校、安城農林高等学校に勤務し、生徒に「将来自分の経営に取り入れたい品目の調査研究」を課題に与えて常に「考える農業経営の実践」を指導するとともに、地元で若手農業者に特産品の栽培指導を行うなど新城地域の農業を担う人材の育成に尽力されている。

教諭時には、農業後継者ではなく農業経営者となるために「考える農業経営の実践」を指導し、将来の農業経営に役立つ地域農家への宿泊現場実習、草花複合環境制御温室の竣工等、農業経営者の育成に精力的に取り組まれた。

教頭時には、平成 17 年度から始まった J A 愛知東「こども農学校」に全面的に協力し、生徒を指導役で派遣しては生徒自身に農業の意義や魅力を感じ取らせる教育を行うとともに、次世代の農業を担う子供達（小学校 3 年生から 6 年生）が農業への興味関心を高め、この地域の農業者を志すよう長年、公私にわたり支援されてきた。現在までに「こども農学校」の卒業生 5 名が、新城高等学校に入学・卒業後、就農している。

校長時には、新城高等学校において、中山間地農業の小規模な経営基盤を安定させる手段の一つとして農業の 6 次産業化を推進するために、食品製造に係る施設・設備の充実、びん詰缶詰営業許可の取得による加工販売技術の指導に尽力してきた。

また、地元農業の生産振興を図るため、昭和 51 年から新城地域の特産品としてジネンジョと夏キャベツの栽培を自ら実践し、新城地域の農業後継者に対して地元農家と協力した調査研究の成果をもとに技術指導を継続的に行って、地域の農業者育成と生産振興に尽力してきた。

退職後は、愛知県立農業大学校で臨時講師として勤務されているが、新城地域の農家や研修グループからの指導依頼も多くあり、親身になり現場指導に努められて、地域農業の発展に現在も取り組まれている。

技術改善部門



岡崎市

すきがらのうきかぶしがいしゃ
鋤柄農機株式会社

鋤柄農機株式会社様は、天保6年に創業し、明治用水開削後に鍛冶として農具を打ち始めて、昭和36年に法人化し、動力農機の作業機開発を主力としてマルチャー・畦成形機等を開発しトップシェアを維持している。

愛知県農業総合試験場（以下、愛知県農総試）が開発した不耕起V溝直播栽培技術（以下、V溝直播技術）の実用化・安定化に向けた試験に積極的に協力した。同社が不耕起V溝直播機の中核要素である作溝輪の量産化に向けた改良や関連作業機の開発に努力を重ねた結果、愛知県のV溝直播技術による作付面積は平成28年で2,350haまでに広がっている。

また、同社のV溝直播機の出荷台数は、平成28年度累計で県内162台（全国390台）で、V溝直播技術は水稻の直播栽培として全国的にトップクラスの普及実績になっている。

不耕起V溝直播栽培のメリットは、育苗・田植作業の省略、作業効率の高い直播作業による労働時間の削減と農作業の分散化であり、水稻栽培における労働時間は先進的な大規模経営体を対象とした事例調査で30%以上の削減を実現している。このようなメリットを活かして水稻作の担い手農家は、直播栽培と移植栽培を合理的に組み合わせ、栽培面積の拡大を図っている。

野菜産地である東三河地域においては、キャベツ生産農家の意見要望を取り入れて、従来型より地域にマッチした畦成形機の開発に努力されるなど、地域に密着した作業機の研究開発を行い、新しい生産技術の実用化に取り組んでいる。

このように、愛知県農総試や県内農家とのコラボレーションによる研究開発に取り組み、愛知県農業の生産力アップおよび産地振興に寄与されている。

農業・農村振興部門



小牧市

すず き あきら
鈴 木 明

鈴木明氏は、昭和34年に就農して以来、57年の長きにわたりモモ専作農家として、小牧のモモ生産部会活動の充実を図り、部会員の栽培技術や所得の向上にリーダーシップを発揮してきた。

地域に合った優良品種の導入に積極的に行い、自らが地域に合った品種を見極めて良い系統を選抜し、部会への普及推進を行った日川白鳳は現在でも基幹品種として栽培されている。

栽培技術においては、現在主流となっている二本主枝整枝法の導入にあたって自ら試作し、栽培管理面での有効性を確認して、部会員への栽培技術の普及推進を行ってきた。

現在も年5回の研究会においても自らのほ場や技術を惜しみなく提供し、部会員の相談を受けるなど、部会全体のレベルアップに取り組んでいる。

販売面では、市場販売において段ボールによる出荷方法の改善、都市近郊を活かした産直・庭先販売等の直売への取組を率先垂範している。

また、廃棄していた幼果を地元和洋菓子店に出荷する仕組みを作り上げて、農家所得の向上に繋げている。

さらに、モモ生産者の高齢化対策として、地元住民を募集したモモ栽培サポーターの育成指導に熱心に取り組み、モモ産地を支える人材育成と地域農業の活性化に尽力している。

このように、地域の農業・農村振興に大きく貢献されており、部会員への技術指導やモモ栽培サポーター作りに現在も尽力されている。